

■ 花葉会賞受賞者紹介

盆栽のヨーロッパ導入の先駆けとして活躍している

賛花園主 熱田 健 氏

熱田健さんは東京に生まれ、都立園芸高校、千葉大学園芸学部を1964年に卒業され、ただちに父上が経営されていた、新宿三越の園芸部に入られた。同店は特に山野草の販売に特色があったが、そこで経営について経験をつみ、1975年に奥さんご子息3人でオーストリアのザルツブルグに移住した。

現地では地元の苗木生産者に勤務し、各地方を回って見学し、勉強した。その間自作で盆栽を栽培し、ザルツブルグ市内で盆栽展を開き、好評を得ることができた。

1978年帰国後、ウィーンのベルベデーレ高山植物園内に常設の盆栽展示場を設置することを市当局に提案。受理され、2年後にヨーロッパ最初の公営の常設盆栽展示場が開場した。

1979年にはフジテレビの番組「ドキュメント日本人」シリーズの取材を受けた。彼がウィーンやザルツブルグを中心に盆栽の普及、指導に孤軍奮闘している様子が丁寧に収録され「ウィーンの森の盆栽士」として全国放送され、盆栽界以外の人々にも反響をよんだ。

その後、大型の冷蔵コンテナを使用して盆栽の輸出を手がけることとなった。これにより、それまでの木箱梱包による輸送に比べて破損事故が激減し、健全な商品を送ることができるようになった。なお搬送中の設定温度は5℃である。

現在までドイツ語圏を中心にマツ（ゴヨウマツ）、シンパク、サツキ、モミジ、カエデ、ソロなどの盆栽を

輸出していたが、ここ10年ほどは庭木の需要が圧倒的に増え、樹種もキャラヤドウダン等が大半をしめるようになった。

この間、ヨーロッパ情勢はユーロ共同体の結成などで激変した。現在はEU各国及びスイスでは鉢の中の土及び根巻きの土については、輸出国の公的機関（農水省植物防疫所等）の所定の検疫を受けその証明書をつけなければ、輸入は禁止されていないとのことである。

彼の30年にわたる努力で、ヨーロッパ各地に盆栽の同好者の団体も増加し、活発に活動している。そして彼は毎年渡欧し、各地をまわり、それらの団体と交流し、栽培、管理などの指導と啓発活動を現在も続けている。

このように、ヨーロッパにおける盆栽や日本庭園の普及に、熱田さんの役割は大変大きいものがある。

(文責 田中桃三)



岩機でのディッピング（線虫対策）



スイス盆栽売場



コンテナ内部

◆ 花葉会賞受賞者紹介

ジェスネリアードと共に

奥 藤 敏二郎

経歴

昭和 18 年 京都府久美浜町（現京丹後市）に生まれる
昭和 36 年 兵庫県立豊岡高校卒業 千葉大学園芸学部入学
昭和 40 年 京都大学大学院農学研究科入学
昭和 42 年 同修士課程修了 兵庫県立淡路農業高校勤務
昭和 53 年 兵庫県フラワーセンター勤務 イワタバコ科植物の
導入、育種、普及に努める 淡路ファームパーク（フ
ラワーセンター分園）園長、同センター園長
平成 15 年 兵庫県を定年退職、自宅で赤穂ジェスネリアード開設

京都大学にいた頃ご縁があった方に誘われて淡路島の農業高校に勤めることになった。高校教師としての仕事はそれなりに楽しかったが、花の“専門家？”として今ひとつ満たされない思いが強くなっていった折、当時出来たばかりの兵庫県フラワーセンターで働く機会をいただき、教師を辞めて同センターに移った。しかし、当時同センターの植栽管理は農試から派遣された職員の縄張りで、行政職の私はデスクワークばかりの期間が続きフラストレーションがたまっていた。

5、6年たった頃にやっと植栽管理の部署に移り、そこで最初の仕事がジェスネリアード（イワタバコ科植物）展示室の開設準備であった。当時、ランの展示室が新しく作られ、それまでランを展示していた部屋が空くので、そこにランと生育環境が似ているイワタバコ科植物を展示する計画であった。とはいっても園のジェスネリアードコレクションはわずかで専用展示室を満たすには程遠く、植物の収集が急務であった。植物園の技術者としての経験がなかった私には人脈もなかったが、つてを頼りながら日本ジェスネリアード協会、他の植物園、個人の収集家など少しずつ収集範囲が広がっていった。国内で収集できる種類には限度があったが、外国の植物の会などを通じて知った人々

との交流を通じてコレクションは飛躍的に増え、数年後に何とか展示室の開設にこぎつけることができた。今に至るまで、ジェスネリアード専用の展示室を持つ施設は他には見られない。

その数年後には他の部署に変わりジェスネリアード担当としての仕事は終わったが、ジェスネリアードの魅力からは離れがたく、仕事の合間を見つけてジェスネリアード室に通う日が退職するまで続いた。この間、植物を収集する傍らそれらを使った育種も行った。特に世界最多のコレクションと自負していたストレプトカーパス原種の多様性を従来園芸品種に取り込むことから始めて、ストレプトカーパスの交配を続けてきた。育成した多数の品種の中には、外国の愛好者からも注目を集めた品種もある。

ジェスネリアードは世界におよそ150属、3000種以上が分布し、概ね低照度で開花し、美しく変化にも富んでおり、属によっては多くの園芸品種もあって、園芸的に大きなポテンシャルを持っている。しかし、セントポーリア、シンニンギア、ストレプトカーパスなど一部を除けば名前すら知られていないものが多い。

日本にはセントポーリアを除くとジェスネリアードを扱う専門業者はないに等しい。それならばささやかながら自分で、退職後自宅に小さな温室を建てジェスネリアードの栽培、育種と販売を続けている。場所の制約のため、扱うのはストレプトカーパスやキリタなど比較的育てやすいものを中心だが、ジェスネリアード普及の芽になればと思っている。



ストレプトカーパス ケンタニエンシス



キリタ オピオボゴイデス

■ 花葉会賞受賞者紹介

地域花き生産の向上を目指して

畑 井 昭一郎

経歴

昭和 17 年 5 月 青森県東津軽郡平内町に生まれる
昭和 36 年 3 月 青森県立青森高校卒業
昭和 40 年 3 月 千葉大学園芸学部園芸学科卒業（花卉園芸学専攻）
昭和 41 年 3 月 千葉大学園芸学部専攻科修了
昭和 43 年 3 月 東京教育大学大学院農学部農学研究科修了
昭和 46 年 4 月～昭和 48 年 3 月
京都大学農学部 園芸第 1 教室助手
昭和 48 年 4 月 青森県畑作園芸試験場園芸部勤務
平成 6 年 9 月 平成 6 年度全国農業関係試験研究所長会研究功労賞受賞
平成 8 年 7 月 「フラワーセンター 21 あおもり」に配属
平成 15 年 3 月 「フラワーセンター」次長を最後に県を定年退職
平成 15 年 4 月～平成 19 年 3 月
コープ・ケミカル株式会社 青森営業所技術顧問

徳坂八郎先生の後に来られた小杉清先生に卒論指導を受けた最初の学生で、実際の指導していただいたのは当時、助手の横井政人先生でした。東京教育大学大学院では山崎肯哉先生、岡田正順先生、鈴木芳夫先生に指導を受けました。京都大学では塚本洋太郎先生及び浅平端先生のもとで 2 年間、助手を務めました。

青森県における花の試験は、私が来た昭和 48 年から本格的に始まりました。ちょうど「青森国体」があり、花を県内に広めようと、花壇用草花の国体時期にあわせた開花を目指した試験が多くありました。その頃の青森県内の花き生産はほとんどありませんでした。青森県におけるキクの作型についても、これといった研究はされていませんでした。

私が試験場に来てから、寒冷地の気象条件を活かしたキク生産、特に旧盆用、8 月の上旬あたりの出荷を目指した夏ギクの作型をはっきりさせようとして始まりました。

はじめに、夏ギクの露地栽培の研究から取り掛かりました。暖地と比べて夏が寒冷のため生育期間が短いの、前年秋に冬至芽をハウスに仮植え、4 月に定植することが暖地と違うところです。

ある程度試験が進みまして、8 月出荷よりも少し早く、7 月から 12 月出荷の 1 年を通した、暖房を使わない施設栽培作型を考えました。その後、彼岸を目指し、品種「天寿」を使った 9 月出荷。最終的に、秋・寒ギクを使い、補助的暖房利用による 10～12 月出荷の施設利用作型を研究しました。

最初、約 3 億円だった生産額が、平成 6 年度では 21 億円とキクを主体に伸びてきましたが、その後、宿根カス

ミソウやカーネーションも多く作られるようになりました。

宿根カスミソウの場合、株冷蔵処理による 9～10 月出荷の抑制栽培技術に取りかかり、寒冷地特有の技術確立し、産地の花き生産も伸びました。

その時に、京都大学の方から共同研究をしないかということで、全国 10 地域の一つとしてダイアンサスと宿根カスミソウの生理生態、特に地域にあった系統や作型を調べる分担研究をしました。この研究も産地形成に役になったと思います。

さらに、「岩手のリンドウ」のような、青森県をイメージさせる花がないかと、いろいろ試験をしました。その時にアルストロメリア、トルコギキョウなどの無加温ビニールハウスにおける作型、開花特性の研究をしました。しかし、いずれの花も全国的に生産されるようになったので、青森県のカラーをだす花というわけにはいきませんでした。

平成 6 年には以上の業績の元に、「全国農業関係試験研究所長会研究功労賞」を受賞しました。

その後、県は花きの生産拡大を図るため、試験研究、研修、優良種苗供給の機能を持つ花き試験場として平成 8 年 7 月「フラワーセンター 21 あおもり」を青森市に創設。これは全国的にも珍しい花き専門試験場でした。これを立ち上げる時から花き研究の企画・推進に加わり、完成後は一員として管理・運営・指導をしてきました。

その内容は、①デルフィニウム、リンドウ、バラなどの本県独自品種の開発、②キク、バラ、トルコギキョウ等の低コスト、周年栽培技術の確立、③新タイプのデルフィニウムやカンパニユラ、リンゴの枝物など新しい需要が喚起できる新品目の開発が主でありました。

平成 9 年から 11 年まで、国の補助のもと本県が主担で、岩手県と山形県の 3 県で「寒冷地施設利用花き生産のシリーズン高品質安定生産技術の確立」の共同試験を行い、ある程度の成果を得ました。

本県の花き産出額は、昭和 50 年が 2 億 4 千万円、昭和 60 年：5 億 8 千万円、平成 2 年：11 億 6 千万円、平成 7 年：33 億円、平成 10 年：40 億円、平成 16 年：39 億 9 千万円となっています。この花き産出額の増加がわれわれの努力の結果と考えたい。

◆ 花葉会賞受賞者紹介

花卉関係書籍編集に花卉園芸の発展を夢として

元誠文堂新光社 編集長 宮田 増 美 氏

宮田増美さんは都立園芸高校、千葉大学園芸学部園芸科（花卉専攻）卒業後すぐに誠文堂新光社に入社し、平成16年定年で退職されるまで同社一筋に園芸雑誌、書籍の発行に携わり、花き園芸界に多大の功績があった方です。

昭和40年4月学部卒業後ただちに同社に入社し、直後は「ガーデンライフ」編集部配属されました。当初、同誌は季刊でしたが46年に月刊となり、そのころからようやく盛んになったガーデニングブームの火付け役となり、その後はけん引役として同様な雑誌の中心的な存在となりました。

宮田さんはその中にあり、その知識と交友関係の広さから中心的な存在となり、各種の特集記事や現場の紹介などにその手腕を発揮され、また同誌の別冊として発行された、「原色斑入り植物写真集」や「原色ベゴニア写真集」の編集を担当し好評を博しました。

その後61年1月に「ガーデンライフ」の編集長、63年1月に生産園芸の啓発書として歴史のある「農耕と園芸」誌の編集長となって活躍。平成10年10月より「フローリスト」、平成13年4月より「いけばな新世紀」のそれぞれ編集長を歴任されました。

宮田さんは同社の先輩であり、学部先輩でもある植村猶行氏、島村宣幸氏などのあとを受け、雑誌のほか各種の園芸関係の書籍の編集に関わってきました。

宮田さんが関わった出版物は園芸関係の生産者、業者、消費者、趣味家いずれにも受け入れられるような書物が多く、園芸界に多大な功績があったものと思

います。

以下では花葉会員に関係のある、宮田氏が担当した書籍の一覧を紹介します。

「切花栽培技術マニュアル」

切花栽培技術マニュアル編集委員会編 1992年

「鉢花栽培技術マニュアル」

鉢花栽培技術マニュアル編集委員会編 1994年

「花の成型苗生産と利用」

安藤敏夫、農耕と園芸共編 1993年

「原色鉢花写真集」

(社)日本花卉卸売市場協会編 1995年

「原色洋ラン写真集」

(社)日本花卉卸売市場協会編 1997年

「カラーリーフプランツ」

横井政人著 1997年

「新しい鉢花」

安藤正彦著 1999年

「世界の食虫植物」

食虫植物研究会編 2003年

「ベゴニア百科」

日本ベゴニア協会 2003年

「A to Z 園芸植物百科事典」

横井政人監修 2003年

「世界のプリムラ」

世界のプリムラ編集委員会編 2007年

「ダリア百科」

日本ダリア会編 2009年

「観葉植物と熱帯花木図鑑」

(社)日本インドアグリーン協会編 2009年

(文責：田中桃三)



編集を担当した本の一部